

## 第 83 回 歴史リレー講座「日本人の生きる指標、聖徳太子」 上野 誠氏 (R3.8.15)

私はお盆の時期になると、薬師寺の管主だった高田好胤さんの説教を思い出します。亡くなって 20 年以上経ちますが、仏説孟蘭盆経を題材とした痛快な法話は当時の人々の心を大いにつかんだものです。そもそもお経というものはサンスクリット（梵語）あるいはパーリ語で書かれたインドの原始經典に端を発しています。これらは中国の義浄や玄奘、鳩摩羅什らの尽力によって翻訳されました。この漢訳仏典がやがて朝鮮半島を経て日本やベトナムなどに広がりますが、まだまだ難解なため注釈書（疏）の助けが必要でした。そこで、7 世紀に法華経の注釈書（『法華義疏』）を著し、人々に説教をしたのが聖徳太子です。この疏をさらにかみ砕いたものを偈と呼び、偈をユーモアあふれる説教に生まれ変わらせたのが高田さんでした。

日本仏教は学問を積んだ人が人々に説教を行うことで広まった始祖仏教であり、その人ごとに宗派が生まれてきました。当初は南都六宗などの集団が代表格であり、平安時代になると中国に渡って祖師から直接学んだ空海や最澄らが登場。鎌倉時代を迎えてようやく、日本仏教を切り開いたのは在家者であり学者でもあった聖徳太子だと認識され始めます。ただ、学問だけでは不十分で、行（日常生活でのふるまい）を伴わなければなりません。もし、路上で倒れている人を見つけたなら、駆け寄って声を掛け名を問うことだ。飢えや寒さに震えていたら食べ物と衣服を与えねばならない。親も無い哀れな人なら歌で心を和ませよう。苦難にあえぐ人には母親のごとく接するべきだ。この思想が太子の行を描いた「片岡山伝説」に昇華します。

ちなみに、私たちに身近な僧侶が唱えているお経は漢訳仏典です。しかし、中国の漢字音ではなく日本の漢字音で読んでいるので、インド人や中国人はおろか日本人でさえ意味不明という困った状況なのです。どれほど経を覚えたとして内容を理解していなければ、真に仏教を学んだとはいえません。

ところで、私はコロナ禍のこの 1 年間で鈴木大拙という仏教学者の全集を完読する機会を得ました。鈴木は明治 3 年金沢に生まれ、不遇の少年時代を過ごしました。小学校教師を経て東京大学哲学科選科に進んだのち、ひよんなことがきっかけで翻訳の手伝いのために渡米。現地で 12 年におよぶ翻訳業のかたわら、仏教の勉強を続けました。その間、常に心に置いていたことは、周りはキリスト教信者ばかりという環境で、どうやったら日本仏教を理解してもらえるかということでした。したがって、鈴木作品はどれも非常に分かりやすく、私に言わせれば名著中の名著ぞろい。みなさまにもぜひお薦めします。

その鈴木も著作の中で述べていることですが、日本仏教は学問中心に偏りがちです。これは仕方がないことで、仏教を学ぶ者であれば、いつかは源流のサンスクリット經典に無性にふれたくなるものです。そんな思いが極まった結果、自分もインドからサンスクリット經典を持ち帰って訳したいという願望が生まれるのです。その代表が玄奘三蔵であり、彼の思想を引き継ぎ大切に守り続けているのが薬師寺です。

漢訳仏典を通して広まった日本仏教は、お経という学問性に限らず食べ物、絵画、彫刻、お香などの形を借りて各地に根付いてきました。中東で発生したユダヤ教を起源とするキリスト教もまったく同様です。やがてパウロを通じてヨーロッパへもたらされ、ラテン語經典、ギリシャ語經典が生まれました。15 世紀には各国語で聖書に翻訳され、さらには親しみやすい讃美歌に姿を変えて教化が進みます。最終的には儀礼などを通じて世界各国で発展を遂げてきました。世界宗教への道のりは仏教もキリスト教も大差はありません。

最後に、「聖徳太子伝説」は、太子が日本仏教の宗祖であり悲劇の皇太子でもあることに深く関わっています。その行は大きく分けると祈り、親孝行、慈悲、智慧、武道、夫婦愛の 6 つ。これらはすべて日本人が身に着けるべき行いです。ところが近年、『日本書紀』に描かれた太子像は後代の捏造による伝説に過ぎないという考察が見受けられます。伝説には違いないのですが、だからこそ太子信仰には日本仏教の神髓が息づいています。日本人が太子を好きなのではなく、むしろ日本人の好む思想や価値観に基づいて伝説は形成されました。「和こそがすべてに優先する」という風土のもとで生まれた太子伝説。われわれが理想とする日本人像、日本社会像であり、和の化身が聖徳太子という時代を超えた英雄なのです。